

青年国際交流事業の在り方検討会(第4回)

議事録

青年国際交流事業の在り方検討会（第4回）議事次第

日時 令和4年5月13日（金）15:15～17:15

場所 オンライン会議（Webex）

1 開会

2 議事

(1)事務局からの説明

(2)意見交換

(3)その他

3 閉会

出席者

（委員）

南島座長、家島委員、川澤委員、菊地委員、中村委員、宮寄委員

（内閣府）

黒瀬青年国際交流担当室長、田中参事官、山本調整官、梅田参事官補佐

（オブザーバー）

一般社団法人日本旅行業協会 千葉信一 海外旅行推進部副部長

一般財団法人青少年国際交流推進センター 駒形健一 理事長

南島座長 それでは、第4回「青年国際交流事業の在り方検討会」を開催いたしたいと存じます。

本日も大変御多忙のところ、御参集いただきまして、誠にありがとうございます。

それでは、まず最初に、委員が6名、オブザーバー2名で合計8名そろっているかどうか、委員の出席について事務局からお願いいたします。

梅田参事官補佐 本日は完全オンラインでの会議の開催ということになっております。今、委員全員の方に御参加いただいております。また、オブザーバーお二方にも御出席いただいております。内閣府側からは黒瀬青年国際交流担当室長、田中参事官、山本調整官が参加しております。本日もどうぞよろしくお願いいたします。

南島座長 ありがとうございます。

それでは、早速でございますが、議事に入りたいと存じます。本日の議事内容は、1番、事務局からの説明、2番、意見交換、3番、その他ということになっております。

まず、議論に先立ちまして、事務局より資料についての御説明をお願いいたします。

○梅田参事官補佐 それでは、今、南島座長からありましたけれども、本日は「グローバルネットワークの効果的活用についての取組」「令和の新事業」、この2点について御議論いただく予定になっております。

まず、事務局から資料について御説明申し上げます。1点目「グローバルネットワークの効果的活用に向けた取組」ということでございます。資料1の左側に「強化に向けた視点」ということでお示ししておりますが、2つございます。1つ目は、ネットワークそのものの強化ということ、2つ目は、ネットワークの活動をどのように発信していくか、見える化を図っていくか、こういったことについてそれぞれ具体的な取組はどういうことをしていったらいいか、これを資料としてまとめております。

真ん中の欄は「現状」ということで書いております。これは、おさらい的になりますけれども、内閣府の青年国際交流事業に参加したOB/OGの同窓会組織、1万2000人ぐらいの会員で47都道府県に支部を持っております、IYEOという団体が組織されているということでございます。様々な活動を行っていただいているということでございます。海外のほうも「東南アジア青年の船」事業「世界青年の船」事業の参加国が各国で同窓会組織を設立いたしまして、それぞれ国際的組織も組織されております。この中で年に一度の国際大会の実施、こういった取組もしていただいているということでございます。

その上で、こういった現状もありながら、グローバルネットワークをどういうふうに強化していくか、具体的な取組をお示ししております。

まず「既参加青年の交流機会の増加」ということでございます。我々の事業に参加していただいて、その後、いろいろネットワークがつながって活動していただくということが我々の事業の中で非常に重要な論点になるわけですけれども、終わった後に参加がなかなかかない、活動がかない、そういった声も聞かれるところでございます。これについては、やはり継続的に交流の機会を提供していくことも大事ではないかということで

お示しさせていただきました。例えば事業参加の数年後に交流会の機会を持つ、そういった取組も一つ考えられるのではないかと、こういうところでございます。

2つ目は「既参加青年の活躍の場の増加」でございます。OB/OGがいろんなところで社会貢献活動をしてもらうということが事後活動で非常に重要なことでありますが、コロナ禍ということもありまして、活動の機会がなかなかつくれないという声を同窓会組織からも聞いております。こういったところも踏まえながら、今度、令和の新事業ということを考える上で、OB/OGの方々に、国内外問わずということですが、我々の事業のプログラムに積極的に参画してもらい、それによって活動の機会もつくってもらい、こういったところも取組として重要なのではないかと、こういうところでございます。

3つ目は「参加事業間の横のつながりを構築」です。我々は5つの事業ということで実施しておりますけれども、例えば「東南アジア青年の船」事業、「世界青年の船」事業、日本・韓国青年親善交流事業、日本・中国青年親善交流事業、国際社会青年育成事業とあるわけです。一緒に参加した人たちはネットワークでつながりやすいわけですが、違う事業に参加した人ということであると、なかなか接触の機会がなくて、ネットワークとして機能しにくいということがあるのではないかと、こういうことです。オンラインを使うということであれば参加事業間でも一緒に何か取組をするような機会を提供できるのではないかと、こういった発想で例に書いております。例えば最初に始めるときに合同研修を行ったり、事業参加終了後に全体で事業報告会のような形で、例えば「東南アジア青年の船」事業ではこういうことを体験しました、「世界青年の船」事業ではこういう体験をしました、日本・韓国青年親善交流事業ではこういう体験をしましたというような体験を共有する場をつくって、全体のネットワークということにつながりを持っていくのも一つの方策なのではないかと、こういうことで提示しております。

4つ目は「青年国際交流事業のグローバルなネットワークのデータベース構築を検討」としてあります。我々の事業に参加して、その後、継続的に活動してほしいし、我々ともつながってほしいということを考えているわけですが、例えば今でも1万2000人の会員がいるのですが、ネットワークで実際に活動してもらえていないという状況もあるし、我々も完全に把握し切れていないということもあります。網羅的にどういった方がどこで活動しておられるのか、そういったところを収集しながらネットワークのデータベースをつくっていくというのが大きな示唆になってくるのではないかと、こういうところを考えているところです。

次に、見える化ということですが、OB/OG同窓会組織のネットワークの活動をどのように発信していくかということがもう一つ大きな観点ではないかと、思っております。全国、世界各地にいるOB/OGがどのような形で活躍しているのかという発信は、もちろん評価、効果を示すという観点もございまして、ほかに新たに意欲のある青年の募集にもつながっていくような形の活動になるのかなということ。この点「現状」のところは少し書いておりますが、今、いろんな形でOB/OGが事業参加後に各界で活躍してもらっていますけれど

も、その後どういうふうな活動に結びついているのか、社会貢献活動もどのような形で行われているのか、そういうところが十分に発信されていないのではないかという問題意識を持っております。そういったところでどういった対応策、今後の取組が考えられるかというところで2点示しております。

1点目が「既参加青年の活動の見える化」です。例として、OB/OGの社会貢献活動のデータベースを整備して、データベースを見える化して対外的に発信してみたらどうかということを書いております。文字だとなかなか分かりにくい部分もあるかと思いますが、こちらは画面でイメージを示しております。今まで評価や効果という面でも課題を抱えてきたわけですが、活動の実態を我々もそもそも把握し切れていないですし、それをどういうふうに見える化していくかというところに課題を抱えておりました。その点、まずは活動の実態を収集・把握しながら、全体のマクロの姿でどのぐらいの活動量があるのか示すというのも一つ取組として必要なのかなと思っております。

こちらについては既に同窓会組織とも連携しながらどういうことがあり得るか考えているところで、そのイメージを少し皆様にお示ししておりますが、例えばここに映っている画面でいうと、下に幾つかバーがあって1から10という形になっております。それぞれ御自身で活動をこの中に入力してもらって、その活動量が全体像として見えてくるというところなんです。かいつまんで御説明しますと、活動の組織がどこで活動していますかという話や、運営の人数がどのくらい、参加人数がどのくらいというところで、どういった活動をOB/OGの方々がやっているかを収集して発信していくということで、こういった形のデータベースをつくって発信していくのも一つのアイデアではないかと考えているところです。

次に「既参加青年の活躍の発信」で、今のところと少し重なる部分もありますが、まずマクロの量をしっかり把握して、効果、総量を把握しながら、実際に具体的にどういった取組をしているのか、我々はインタビューとかも行ってどんな活躍をしているかという状況も把握するように努めていますが、こちらを戦略的に青年の方々に伝わるような形で発信していく、こういったことも取り組んでいかなければならないことではないかということです。具体的な手法やそういったところについての御意見も頂ければと思っております。

続きまして、資料2は、新事業についてのイメージです。「新事業について(イメージ)」としている資料ですが、これまでの検討会での議論を踏まえまして、令和の新事業の全体像のエッセンスについてまとめたものでございます。

まず、これまで3回の検討会の中では、事業の大きな目的ということで「国際社会・地域社会で活躍する次世代グローバルリーダーの育成」を掲げた上で、次世代グローバルリーダーの人材像ということで5つの視点をおまとめいただいたと思っております。大きな目標や考え方、こういったものを前提にしながら、伝統を継承しつつ、大胆に変革した令和の新事業として再スタートしていくということで取り組んでいくのがいいのではないかと理解しております。

伝統というところでいいますと、これまでの60年近くにわたる事業で得てきたOB/OGとい

う財産もありまして、また外交上果たしてきた役割も継承しながら、様々な状況変化もある中で、この検討会で御議論いただいた視点を基に大胆に変革して令和の新事業ということで再スタートしていくのが必要ではないかと考えておるところでございます。

様々な時代の要請ということで書いてありますが、こういった要請がある中で、この検討会でおまとめいただいた3つの視点ということで「意欲の高い青年の参加」「効果的なプログラム」「グローバルネットワークの効果的活用による事後活動」、この3つの視点で実際に令和の時代にふさわしい、新たにチャレンジしていく取組のエッセンスをまとめているものでございます。

まず「意欲の高い青年の参加」で申し上げますと、我々の事業の課題というところで社会人の参加がなかなか難しいということがあると思います。そういった中で、学生も学業との両立が難しいという方もいらっしゃるかと思いますので、仕事・学業との両立をしながら実践力を向上させて、また、いい人に集まってもらうということでいうと、魅力ある事業というものを構築していくのが大事ということです。

それから、いい人たちに集まってもらうということを考えたときには広報活動も重要だということで、青年に響くようなコンテンツをつくるということ、手法ということでいうと、YouTube、SNS、それもただ単にその媒体を使えばいいというだけではなくて、インフルエンサーを使う、いろんなことが出てきたと思いますが、戦略的な広報を実施することが重要ではないかということです。

それから、次世代リーダーを目指す者を総合評価で選考ということで、語学習得を目的とする、そういうことだけではなくて、次世代リーダーを目指すという者を総合評価という形で選考してみようと、また検討会の中でかなり積極的に御議論いただいた、多様性がこの時代に求められているというところで、多様性重視枠という新しい枠も設定して、いろんな人たちにこの事業に参加してもらえる枠組みをつくっていかうというのが一つのエッセンスなのかなということです。

最初にも申し上げましたけれども、社会人の参加を増やしていきたいという中で、経済団体ともよく連携しながら、広報なども強化していくというのが入り口のところで重視していく点ということです。

2つ目は「効果的なプログラム」ということで、こちらも様々、検討会の中で御議論いただいたことかと思いますが、その結果というところで申し上げますと、共同生活という場をつくっていくのがプログラムの中で重視していくべき点だろうということです。ただ、共同生活を営むというだけではなくて、プラスアルファで実践の場をつくっていく。この2つを両立させたプログラムが効果的なプログラムではないかということで、令和の時代には今までやってきた共同生活という枠組みに加えて実践の場をつくり出すという新しい実践型プログラムを構築するのが重要ではないかという発想でございます。

それから、先ほどの仕事・学業との両立というところに出てきましたが、オンライン技術をしっかり活用しながら、またオンライン技術もただ単にZoom会議だけではなかなか効

果が上がりにくい部分、不足している部分もあると御議論いただきましたけれども、そういった中で効果的なチームビルディングという手法を取り入れていくことが重要ではないかということだと思っております。

地域という点や、この事業の広がりも重要ではないかという御指摘もかなり多く頂いたものと思っております。いろんな人を巻き込んでいくという中で、例えば地方公共団体と連携を深めていく、もちろん国内外のOB/OG、地域の住民、こういった多様な人たちを巻き込んだ事業の展開が効果的なプログラムにつながるのではないかという御議論を頂いたと思っております。

3つ目のグローバルネットワークについては先ほど御説明させていただいたところを軸に整理しております。

その上で、2ページ目ですが、今お話しした点を踏まえて新たなプログラムのイメージがどのようなものになるかということについても皆様から御議論いただくべく「令和の新プログラム（イメージ）」ということでお示ししております。

便宜上、4つのステップに分けております。Step1では、意欲の高い青年の参加に向けてプログラムの魅力向上、広報の強化等を行って募集・選考を行うということ、Step2では、デジタルのメリットを活用してオンライン交流の充実を図って関係構築を行っていくということです。Step3では、感染症等のリスクを低減させながら、先ほど申し上げましたような共同生活と実践の場を組み合わせたオフラインでの実践型プログラムを行っていくという発想です。Step4では、事業参加後のネットワークの連携強化、事後活動の見える化を図っていくという工程が令和にふさわしい新事業、新プログラムの形ではないかということでお示ししているところです。

下に幾つか具体的な取組のイメージを書いておりますが、特にStep2の関係構築でいいますと、知識のインプットを図りながら、というところで親密な関係構築ができるような環境も充実させながら、オンライン上で交流を深化させていく、こういったところをイメージしております。その上で地域の地域実践活動プランニングということにしておりますが、Step3のオフラインの交流というところをチームビルディングでプランニングしていくことで生きた実践力を身につけていけるのではないかと考えております。チームビルディングというところに関して言えば、この後、御紹介します地域実践活動を行う上でパートナーになってくるであろう地域のOB/OG、地方公共団体、地域のNPOや大学、こういったところとも協力いただきながら行っていくことで結びつきも強まってくるのではないかと考えています。

オンライン交流のからは、お話ししたようにかなり充実した形になって、時間も相当程度かかるのではないかと思います。週末などを使って4か月ぐらいかけてオンラインで行っていくということであれば、社会人の参加の可能性も大幅に広がって充実した交流ができるのではないかとイメージしております。

こうした関係構築というステップを経てStep3で交流と実践ということをやっていきま

すが、ここについては、この検討会での御議論も踏まえたと、感染症等のリスクを低減させながら、共同生活と実践の場を実現するオフラインでの交流を考えたということです。共同生活に関しては、これまでの議論も踏まえたと、世界各国の意欲の高い青年と日本の青年と一緒に船に乗ってそういう空間で共同生活を送る体験はほかのプログラムでも得難いものであって、国としてこれを提供していくということは重要ではないかと考えております。その上で、船での共同生活にとどまらないで互いに一緒に協力して活動を行っていくという実践の場をつくっていくことで、次世代グローバルリーダーを育成していく上でより効果的なものになると考えております。

また、仕事・学業との両立、感染症等のリスクを踏まえると、外国青年と日本青年が共同で実践を行う物理的な場所ということでいうと、日本国内の地域を舞台にして行うのが望ましいのではないかと考えておりました。具体的にどのような運用かということ、Step 3にあるとおり、船をベースキャンプのような形で使いながら、日本国内で地域数か所を回って、最後の1か所はそれなりに長い期間停泊しながら実践の活動を行っていくのが一つの案ではないかということです。

そうしたプログラム活動を経た上で、Step 4でこれから議論を頂く形としているネットワークの活動を促進していくことにつながるのではないかと考えています。

また、より多くの参加を募る上で社会人等向けの短期プログラムの検討、こういったことも選択肢としてはあり得るのではないかと考えておりますので、この辺りも後ほどの意見交換で御議論いただければと思っております。

以上、長くなりましたけれども、よろしくお願ひいたします。

南島座長 ありがとうございます。

まずはグローバルネットワークの効果的活用に向けた取組の御説明を頂きました。その上で、新事業について全体像の御説明を頂いたところです。ここから先はそれぞれに分けて、前半戦ではグローバルネットワークの効果的活用に向けた取組について御意見を賜りたいと存じます。その上で、先ほど新事業についてということで全体像をお示しいたしましたが、後半戦でこちらについて御議論を賜りたいと存じます。

まず、グローバルネットワークの効果的活用に向けた取組、今、画面に映っているものですが、こちらについて御議論いただきたいと思います。まだこういう議論の余地があるのではないかと、足りないところがあるのではないかとということにつきまして、もしございましたら、どうぞ積極的にいろいろと御提起いただければと思います。

御発言の順番ですが、先に御専門的な立場から青少年国際交流推進センターの駒形理事長、同じくオブザーバーの日本旅行業協会の千葉副部長から御発言いただければと思います。その上で委員の御発言をお願いいたします。順番は、宮崎委員、中村委員、菊地委員、川澤委員、家島委員の順番で御発言いただこうと思っております。

最初に、もし補足等ありましたらお願いと思いますが、青少年国際交流推進センターの駒形理事長、御助言いただけるようなところがありましたら御発言いただければと

と思いますが、いかがでございましょうか。

○駒形オブザーバー ありがとうございます。

先ほど内閣府から説明があったグローバルネットワークの取組の方向性について、最初の既参加青年の継続的な交流等の実施ということですが、その事業に参加して、後、個別にばらばらになってということがあるのでしょうか、それぞれの人生を歩んでいくという中で、数年後に再び何らかの形で交流する機会があるというのは大変いいことだと思いますし、彼らの活動の活性化につながるし、情報共有にもなると思います。

その後の3つの活躍の場、横のつながり、いろいろあるのですが、全部、既参加青年と書いてあります。個々人の活躍の場、個々人の横のつながりという感じがするのですが、個々人であるだけではなくて、日本でしたら全国的にIYE0という全国組織がありますし、各都道府県ごとにIYE0の組織があるし、あるいは様々なテーマでチームで活動している部分もあると思いますので、そういった個人だけではなくて組織やチームの発信の機会、つながりの機会も当然あってしかるべきと思いました。

あと、いろいろおっしゃったことは大変重要なことで、ぜひ前向きに取り組んでいただきたいと思います。

私の個人的な経験では、「東南アジア青年の船」事業と「世界青年の船」事業、それぞれ同窓会組織があるのですが、先ほど内閣府の方がおっしゃったように、どうしても縦割りになってしまって、「東南アジア青年の船」事業「世界青年の船」事業だけの中でクローズドで活動している。それはそれでファミリーということで大変いいことですが、それをまたがって、相互に違う船の文化を持っていますから、違う文化的背景のある、経験の違う者同士が横につながるというのは大変いいことだと思っています。特にASEAN各国の同窓会の方々にとっては、ASEANのみならず世界各国の様々な人と交流する、ネットワークでつながるといのは大変有益なことだと思っています。

取りあえず、今のところ、以上です。よろしく願います。

南島座長 ありがとうございます。

既参加青年、個人ではなくて、IYE0やチームで活動していただいているところも取り込むべきだと、あるいは船ということでの横のつながり、他省庁、あるいはASEANとのつながりも射程に置くということで御提供いただいたところかと思います。ありがとうございます。

それでは、日本旅行業協会の千葉副部長、よろしく願いいたします。

○千葉オブザーバー ありがとうございます。

ここの議論というよりは、その次のときにお話をしようと思っていたのですが、私が感じるどころというのはここの議論ではないのかもしれませんが、OB/OG会という組織を活性化させるのはすばらしいと思いますが、一方で見える化というところから言えば、社会に対してどうやって見せていくのかというところも議論されていくべきかと思っています。

例えば、宮寄委員に後で補足いただくと大変助かるのですが、企業人の目線から言いますと、こういった事業に参加してきた社会人が帰ってきて、こういったOB/OG会の組織では活躍、発表の場があるとしても、会社や、例えば経済同友会の総会であるとか、そういったところも含めて、アウトプットできるような場があって社会的にも認知される必要性というのが今後新しい取組として必要なのではないかと理解しております。ポイントがずれるかもしれませんが、その辺を感じている次第でございます。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

重要な御指摘を頂いたと思っております。主としてこちらで整理した取組の方向性は、青年国際交流事業に応募していただける方を増やしていくというフィードバックループを念頭に置いておりましたけれども、おっしゃるとおり、税金でやっていることであるということもありますし、企業の参加を取り込んでいくということでは、会社側からどう見えるのか、社会からどう見えるのかという視点も必要であるのは御指摘のとおりだと思います。ありがとうございます。

それでは、宮寄委員、よろしく願いいたします。

○宮寄委員 宮寄です。私のほうから気づいた点も含めて話をさせていただきたいと思えます。

グローバルなネットワークデータベース構築の検討というところで、参加青年がアクセス可能なデータベースの構築を検討ということなのですが、こういったデータベースの構築は必要かなと思っています。こういう提供というのは非常に重要なかなと思う一方で、一旦この事業が終わって、ほかの生活に戻った中で随時更新するということはハードルがあるのではないかと、経年で忘れていってしまうのではないかと懸念があります。その部分で既存のFacebookやLinkedInを使っていきながら、どういうふうにやるのか、私自身、回答はないのですが、既存のFacebookやLinkedInだと常に情報がアップデートされるので、こういったことがあったということがずっとリマインドされていくと思いますが、この辺、どういうふうに併せていくかというところが一つ課題なのかと思いました。

企業目線のところで御質問いただいた点ですが、経済同友会も学生との交流もやっているの、何らかの形でそういったところで目線を合わせていけることもあるのではないかと考えた次第です。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

更新の件について御指摘いただいたので、後半戦では企業目線、同友会は学生との交流もやっておられるというお話を頂きました。後半戦のところ、もう少しもし可能であれば補足していただくとありがたいと思います。どういう内容なのだろうと思われる方もいらっしゃるかと思いますので、可能でしたらお願いいたします。

○宮寄委員 例えば経済同友会では「学校と経営者の交流活動」という取組があり、経営

者を中学校、高校、大学の授業や教員研修、保護者などの講演会にゲスト講師として派遣しています。そういった活動との連携や「未来選択会議」という多様なステークホルダーを招いて、日本の未来に向けた選択肢を提示していくための会議があり、その中に学生などの若い世代にも参加いただいている。こうした本会の活動の中で若い人達との接点を設けることもできるのかなと思いました。

南島座長 ありがとうございます。同友会でいろんな活動をしていらっしゃるところとのコラボレーションということですね。

○宮崎委員 そうです。

南島座長 ありがとうございます。

役所ですので、できるかどうかということについては検討が必要かもしれませんけれども、いい御示唆を頂いたと思っております。検討の材料としてお預かりさせていただければと思います。ありがとうございます。

それでは、中村委員、よろしく願いいたします。

○中村委員 今日、画面を出せずに申し訳ございません。

今、宮崎委員のお話を聞いて私自身も情報の更新という視点について一言申し上げたいと思います。

私自身「東南アジア青年の船」事業に参加して、それから何年間にもわたって事後活動に参加する機会がなく、海外にいたりしたものですから、その後、十数年を経て、たまたま元のナショナルリーダーが縁をつくってくれて、自分自身がナショナルリーダーを引き受けるという、縁が戻ったわけです。そういったことを考えますと、いかに情報更新をしていくかという仕組みがとても重要かと思えます。

例えば、以前であれば「MACROCOSM」という雑誌が年に一回、皆さんに送られてきたと思いますが、今後はそれをメールベースのような形にして、年に一回とかメールが会員全員に送られて、その段階で自分でアップデートする。自らアップデートする機会を定期的に呼びかけるという仕組みさえあれば、もし私がそういうメールを頂ければ、今は駄目、でも例えば3年後には定年になるから、その後だったら積極的に関わりたい、そういった意思表示ができると思います。

内閣府あるいはセンターのほうでもスタッフがお替わりになっていったときに、同じ人間のプレーンに、脳みそに頼ってしまうというのはなかなか難しいと思いますので、そのデータベースを検索することによって、ある程度、何かをやりたいときとか、そういう情報を引き出せる。あるいはそれはクラウドネットワークでお互いに信頼関係がある、少なくとも既参加青年という信頼に基づいたネットワークということで、自分で検索して関係する人にコンタクトできるとか、そういった仕組みが今の技術だったら構築できるのではないかという期待を持って聞かせていただきました。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

今までになかった論点として情報の更新について定年後という視点がなかったというのは、ハッとさせられた部分であります。定年後の視点ですね。お仕事をされている方はどうしてもお忙しいので、定年後に関わりたいと思っている方がおられるかもしれない。今の情報技術だとそこをフォローすることができるかもしれない。事業が1959年開始ですから、結構長い時間がたっておりますけれども、定年後の方々をフォローアップする技術が登場しているという点に注目するのは重要な視点かと思えます。ありがとうございます。

それでは、菊地委員、よろしく願いいたします。

○菊地委員 ありがとうございます。

梅田さん、御説明ありがとうございました。

私からは3点ございます。

1点目、プログラムについて改めて考えてくださって、恐らくプログラムの中での変化はたくさんあると思います。ただ、人生を長いスパンで見たときにプログラム中の変化、変容はわずかなので、次世代リーダーを創出するためには追っていく必要があると思います。資料2の次世代リーダー、ずっとあったかと思いますが、そういうリーダーを創出していくためには、その後もいかにシナジーを起こし続けるかというエコシステム、すなわち生態系が必要かと思っています。

例えば事後でも挑戦が挑戦を生むような仕掛けだったり、アクセラレーションの仕組みが必要かと思っております。例えば我々もたくさんプログラムを運営していますが、やはり何年後かというので起業したり何かを始めたりという方々がたくさんいらっしゃいます。例えば我々でいくと、タイムオブ生が何かをしたいと思ったときにはその分野の先駆者に相談ができるとかアドバイスをもらえるというタイムオブマフィアをつくりまして、そういう方々を一覧にして、いつでも相談ができるとか、起業したいときに企業の専門の会社に無料相談を受けられるとか、コーチングを受けられるとか、インタビューしてもらうことで思いを可視化してもらってPR促進できるとか、人・物・金のサポートをしてもらえるとか、そういうアクセラレーションの機能を充実させていっています。

データベースの可視化もよいのですが、データベースを可視化したり機能を充実させるだけだと、使われないおそれもあると思うので、こちらからいかに機会を提供していくかというのが大事かと思っています。最近我々がやっている取組では「次世代リーダー×マフィアピッチ会」というのをやっております。高校生、大学生、社会人の方々に何かを始める方、もしくは何かをやって活躍されている方々にピッチをしていただいて、マフィアからフィードバックを受ける、何かコラボレーションを生み出す、そういうこちらから積極的な活動を促したりしています。

2点目は、体験後のネクストステージの機会提供です。さっき話した1点目は参加者の自主的な活動の促進のエコシステムだったのですが、2点目はどちらかというと運営側からの機会提供です。一回のプログラムだけだとスイッチが入らなかったり、そのときにスイッチが入っても、またもう一度スイッチを押してあげる必要はあると思うので、それを

どんどん加速させるような取組もつくっていったほうがいいかなと思っています。ただ、横串の事後報告会というのもいいなと思っています、体験を共有することで周りに共有されるので、誰かの気づきが誰かの気づきになるというふうな感じでいいと思います。例えば何度も内閣府のプログラムに参加することができるか、内閣府の若者部を結成して内閣府の方針に意見ができるような会を設けたり、そういうことをしていくといいのではないかと思います。

3点目、これもデータベースに関してですが、あったほうがいいのですが、見ても使われなと思うのです。何かすごい人たちがたくさんいるというのは思うと思いますが、そこから何かアクションを起こせるかということ、やはり難しいと思いますので、いかにシナジーを起こすかという工夫が必要かと思っています。工夫についてはまだアイデアは出ていないのですが、私からは以上3点です。ありがとうございます。

南島座長 ありがとうございます。

アクセラレーションの仕組みと、ネクストステージということで事後報告会や若者部の結成のようなお話、それから、いかにシナジーを起こすかということでデータベースでなくともう一ひねりできないか、こういう御意見を頂いたのかなと思います。プログラムそのものにも関わるかもしれませんが、ひとまずはネットワークの効果的活用にも関係するところもありますので、御意見としてありがたく頂戴したいと思います。ありがとうございます。

川澤委員、よろしくお願いいいたします。

○川澤委員 ありがとうございます。前回欠席いたしまして、申し訳ございませんでした。

今、お話をお伺いしてまして、菊地委員のアクセラレーションの機能は重要と思いました。恐らくデータベースで氏名や職業やコンタクト先があっても、使われなくなる可能性は高いかなというふうにお話を聞いて思いました。

あと、宮崎委員がおっしゃっていた、更新にかなり手間がかかると更新されなくなってしまったり、情報が無駄になってしまうと思うので、今、そういうデータベース、プラットフォームみたいな形で各自が適宜更新したり、LinkedInのプラットフォームとリンクづけたり、昔に比べたらかなり簡易にアップデートできるようになっていると思います。例えば事後活動のプロジェクト管理みたいなものをひもづけて、プロジェクトに参加するメンバーを承認したら、気軽にそのプロジェクトに入って情報共有したり意見交換できるようにしたり、ある意味、名簿だけではなくて事後活動のフィールドをひもづけてもいいのかなと思いました。恐らくそういうこともプロジェクト管理のツールを使えばできると思うので、個人情報の管理とかもあるので難しさもあるかもしれないのですが、少し考えられる余地はあるのではないかと思います。

2点目ですが、見える化の部分でデータベースを整備というところで、先ほどIYE0のイメージを出していただいたかと思っています。あれはすごく私としては面白いと思っています、恐らく先ほどのネットワーク強化のためのデータベースと全く別のものをつくるとい

うのではなくて、そのデータを基に自動的もしくは多少の加工をして見える化する形に持っていきのいいのではないかと思いました。そういった全体のマクロ情報と個々の事後活動をうまくつくれるようになれば、恐らく対外的なPRの材料にもなると思いますし、事後の政策評価の情報にもつながっていくのだと思います。それが海外の同窓会組織も巻き込んでコンテンツも英語・日本語で発信できれば、幅広く情報のPRにつながると思うので、うまくネットワークの強化とネットワークの見える化のためのコンテンツをつなげていけば、非常に効果的、効率的な取組になるのではないかと感じました。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

今のイメージは出しておいていただいてもよろしいでしょうか。ありがとうございます。

ネットワークのほうの既参加青年の活動の見える化ということで書いていただいています。データベースの構築というところでのイメージを出していただいています。データベースというのはまずはこれをつくってみようかと、これは梅田さんが頑張っているいろいろお手伝いいただきながら工夫してイメージをつくってみたいと思ったものですが、これをまずはつくるといってよかったですでしょうか。

○梅田参事官補佐 今、皆様方からも御意見を頂いて、お示しさせていただいているのですが、こちらの同窓会組織の中でこういったところにたけていて問題意識を持っておられる方と一緒にこういうものをつくっていきましょうというお話をさせていただいているものです。

今、川澤委員もそうですし、菊地委員もそうですけれども、活動がいろんな人に伝わっていったりするためにこういったものをどういうふうに使っていくかというところでは、項目をどうする、どこどこをつなげる、そもそも名簿とうまくリンクさせる、そういったところは拡張していかなければならないし、これから設計していく上で、頂いた意見も踏まえながら、どういうことを設計していけるか考えていきたいと思っているところでございます。

南島座長 ありがとうございます。

まず最初に全体像を見せるために、ひとまずはこういうデータを見せていくことを考えておられるということですね。裏側のデータベース、個人情報とのリンクですとか、どこまで見せるかというのは、まだまだ検討の余地がある。ただ、うまくつなげることができればいいと思われている段階ということですよ。

○梅田参事官補佐 はい。

南島座長 それから、個別の活動については、既存のSNSがありますので、Facebookとか、そういうものを使ってつなげていくということと併せて考えていかなければいけないので、どういう組み合わせでシステムを組んでいくのかというのは専門的な業者さんにも相談しながら組み立てていかなければいけないところなので、まだまだということではあるかと思いますが、ひとまずここにお示したような情報ぐらいは共有できるようにしていこ

うというところをお考えである、こういう理解でよろしいでしょうか。

○梅田参事官補佐 そのとおりでございます。

南島座長 ありがとうございます。

ここを入り口にというふうに御理解いただけましたら幸いです。

それでは、家島委員、よろしく願いいたします。

家島委員 家島です。よろしく願いいたします。

まずは、内閣府の方によくまとめていただいてありがとうございます。感謝を述べたいと思います。また、ほかのメンバーの方が言っていたことで十分尽きるかなと思っております。その上で、研究者あるいは教育者の立場から若干のコメントをさせていただきたいと思います。

資料1のネットワークの強化、見える化という2つの部分を見て、研究的な視点でもう一回違う言葉で定義し直すと、強化というのは拡大と充実ということ、見える化というのは公開と発信、そういったことなのかと感じました。

拡大、広げるというところに関して、縦の連携強化、そして横の連携強化、縦というのは時間軸、世代間のつながり、横というのは空間軸、事業間のつながりということで、非常によいのではないか、構造化された取組の方向性ではないかと思いました。

深めるということに関しては、参加者同士のコミュニティ形成、ネットワーキングということがありまして、こちらはプログラム、カリキュラム、そういったところに戻ってくることだとは思いますが、非常に重要な点と思いました。

また、公開と発信につきましては、大きく2つありまして、全体を見せるデータベースをつくる、参加者の一覧を量的に見せるみたいなところと、参加者の特集、個別のフォーカス、ピックアップしたものを質的に紹介する、ビジュアルに紹介するというふうに受け取りました。どちらも必要なものであり、重要と思いました。

伝統を大事にしつつ、大胆に変革していく、そのときに民間企業のノウハウや教育・研究機関の知見、そういったものを取り入れるということは、新しい時代に向けた青年国際交流の在り方を決めるというときに非常に合っているのではないかと思いました。寅(トラ)年だけに「トラディション(伝統)」と「トランスフォーメーション(変革)」をやるのだ、みたいなところも言えるのかなと思いました。

細かい点を言いますと、表記といたしますか、「既参加青年」という表現と「OB/OG」という表現があります。OB/OGというのは、御存じのとおり和製英語でして、海外には通じない言葉です。あるいはLGBTとか性的マイノリティといった時代でもありますので、分かりやすいのですけれども、各種既参加青年で統一してしまうだとか、あるいは別の言葉、アラムナイ(同窓生)みたいな言い方もあるのですけれども、グローバルに通用するワーディング(用語選択)というのもあったらいいかなと、細かい点ですが、そんなことも思いました。

あとは、データベースといたしますか、プラットフォームといたしますか、見せるときのシ

システムなのですけれども、こういったものはSNSを活用すると非常によいと思います。大賛成です。ただ一方で、SNSは非常に移り変わりが速い。10年単位で流行り廃りというものが変わってしまう。もっと短いスパンで変わってしまうこともあるということで、その時代ごとにメジャーなものを活用していきつつも、大事なことは内閣府の担当者のところにも名簿だったりリストだったり情報がちゃんと集約されているということかなと思います。一番理想は、そのデータが、個人情報抜いた部分、公開可能な部分に関して参加者が自由にアクセスできたり、自由にカスタマイズして表示できるといったことかと思えます。

私たちの大阪大学では一部データをTableau(タブロー)というシステムを使いまして、生データ、個人情報の関係ない部分をデータバンクに置きまして、それをグラフィカルにビジュアルに見せるようなシステムだけをウェブサイトにおいて、例えば高校の出身地はどこが多いのだろうというので見たかったら、出身地と学部でクロス集計表を見せるとか、就職先で金融系には男女でどっちが多いのだろうと見たいときは、就職先が金融系と男女でクロス集計表を設定するとビジュアルにブラウザ上で見える、そういったツールも今あります。

例えばそんな形で静的、スタティックなものを見せておく、置いておくということもありだとは思いますが、一方で、動的、ダイナミックに見せる、あるいは活用できるといった形を用意してあげるというのも大事なかなと思います。菊地委員が、つくっても使われなかったら意味がないとおっしゃっていましたが、私も同じように思います。なので、目的次第だとは思いますが、目的に合致した手段で行えばいいかなと思っております。

ネットワークの見える化は後からでもいいと思いますが、強化は事前の仕込みが大事だと思いますので、やはりプログラムの内容とかカリキュラムが一番大事だと思います。同窓会が盛り上がるかどうかというのは、在学中の密度というか、熱量がかなり大きく影響しますので、後から頑張っても母校のためと呼びかけてもなかなか人は集まらないものです。なので、プログラム自体の濃さがネットワークの成功になる。ネットワークができていくかどうかというのは、まさにプログラムの成果、あるいは成功かどうかというところの指標にもなるのではないかなと思っております。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

たくさんのご意見を御指摘いただいたと思いますが、家島委員の言葉で構造を再解釈してお示しいただいたところは大変ありがたいと思って聞いておりました

それから、OB/OG、どういう用語が分かりませんが、統一したほうが良いという御指摘も大事だと思います。

情報、データの利用の仕方ということですが、グラフィカルな表示を大阪大学ではやっておられるということだったのですが、もし可能でありましたら、内閣府のほうにどういうイメージなのか、見せていただけるものでしたら別途お伝えいただくとありがたいと思います。見てみないと分からないと思いますので、グラフィカルな表示とはどん

な感じなのかなと思われているかもしれませんが、よかったら情報提供していただければと思います。

最後のプログラムの濃さが重要だという御指摘はまさにそのとおりですね。重要な点を改めて御指摘いただいたと思っております。

さて、一通り御発言を頂きました。なお、ほかの委員の御発言をお聞きいただきながら、ここは、思いついたのだけれども、追加していただけないかということがありましたら、御発言いただければと思います。民間プラットフォームでこういうのがあるとか、あるいはSNSを使うときにはこういうふうにするとうまくいくのだけれどもみたいな御意見なども頂けると大変参考になります。いかがでございましょう。どなたからでも結構です。菊地委員、よろしく願いいたします。

菊地委員 ありがとうございます。

民間プラットフォームでこういうのがあるという話ではないのですけれども、川澤委員のお話をお聞きして、プロジェクト化というのが一つ事後の活動としてよいのではないかというアイデアの共有です。我々のプログラムでも、オンラインで野生動物保護を学び、アクションするプログラムをやっているのですけれども、4日間で終わらないのです。これが数か月でも完結するのは難しいと思うのです。なので、プログラム中にグループを組んでもらってプロジェクトを立ち上げてもらって、そのプログラム中に終わってもいいですし、プログラム後も続けてよい、続けることを推奨しますというと、比較的皆さんは自発的にどんどんグループで継続してコミュニケーションを取るので、コミュニティとしてはより活性化するということがあります。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

ほか、いかがでしょうか。中村委員、川澤委員の順番でお願いいたします。中村委員、どうぞ。

中村委員 今の菊地委員のお話を聞いてすごくリアリティーがあると思いました。実際、プログラムに参加している最中にアイデアを思いついて、何かやろうと盛り上がるのです。それをその後に続けていくという仕組みが今あるのかどうか分からないのですけれども、それが先ほどのネットワークのデータベースと結びついて、ちゃんとフォローアップできるような形になっていくと、実際に盛り上がっているところで、ではいついつまでに何かをやろうというのを同じ日本の青年だけではなくて海外の青年とのグループの中でそういった話がまとまるとか、やろうという話になるということは大いに考えられることだと思います。今の菊地委員のおっしゃったことに非常に賛同しますということで一言添えさせていただきます。ありがとうございます。

南島座長 ありがとうございます。

川澤委員、よろしく願いいたします。

川澤委員 ありがとうございます。

菊地委員、中村委員のお話で、プロジェクト化が改めて重要だと思ひまして、かつ、以前にプロジェクトに参加され、グループで立ち上がって活動されている方にジョインしたいという人たちも多分いるのだと思ひます。そのときにどういふプロジェクトがあるといふのも実際に分かつて、かつ、中身についてプロジェクトのリーダーから話を聞くとかではなくて、プロジェクトのプラットフォームのグループの情報の中でぱっと過去の経緯が分かるような形になれば、自分の興味と合致しているということがすぐ分かるし、リーダーもわざわざ説明する手間もないのだと思ひます。そういう機能が今いろんなツールであると思ひるので、そこはそういった情報技術を活用して、もう少し簡便にできる、今まではできなかったけれども、できるような取組があるのではないかと思ひました。ただ、やはりコミュニティーを活性化するといふのは誰かが少しは見ていかないと難しい部分もあるのだと思ひるので、そこを誰が担うかといふところはあらかじめきちんと決めておいたほうがいいかなと思ひます。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

ファシリテーションはなかなか難しいですね。ありがとうございます。

いかがでしょうか。内閣府、オブザーバーを含めまして、全体でネットワークの効果的活用に関する補足や御発言の御希望等ございましたらお願いいたします。菊地委員、手が挙がっていますでしょうか。

菊地委員 ありがとうございます。

プロジェクト化であったり、どういふ方々がメンバーにいるのかだったり、そういう可視化の例なのですけれども、私たちだとSlackといふツールを用いてやっています、それだと入りたいたいときに入れて全部見られるので、そういうのは便利ですといふ御紹介と、あとは、最近これは私たちも始めたばかりなので分からないのですけれども、Notionといふデータ蓄積ツールを使っています。誰がいて、どういふプロジェクトが動いていて、いつミーティングがあるのか、誰がどういふ思いでやっているのか、それが全部一覧で分かるものがあるので、そういうのを活用するとうまくやれるのではないかと思ひました。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

Notionのお話と、もう一つ、Slackの活用、Slackは情報がずっと蓄積されていくので、そういう意味で大学のゼミなんかでは非常に使い勝手がいいので私も使っております。そういうツールもあるといふ御紹介でございます。

内閣府、オブザーバーを含めましていかがでしょうか。御発言よろしいでしょうか。また後で時間を取りますので、その際に御発言を頂ければと思ひます。

それでは、こちらのスライドは一旦共有を解除していただきまして、2つ目の資料2のほうに移りたいと思ひます。資料2のスライドの共有をお願いいたします。新事業についてです。令和の新プログラムについて、こちらは全体像でございます。一つ一つのパーツ

をこれまで議論してきたわけですが、改めて全体像として内閣府のほうでまとめていただいております。全体像について新事業ということで打ち出せそうなものを書いている状況にあります。全体像について御意見を頂きたいと思います。

梅田さん、恐れ入ります。短くポイントだけで結構です。大事なところ、新事業のどこを打ち出すのかということについて、もう一度補足の説明をお願いしたいと思います。

梅田参事官補佐 ポイントということなので、短くお話をさせていただきますけれども、全体像ということでいうと、まず1つは、目的をもう一度、再明確化したということ、それから人材像を5つ設定したということ、その上で3つの視点ということで「意欲の高い青年の参加」「効果的なプログラム」「グローバルネットワークの効果的活用による事後活動」ということについて、それぞれポイントをまとめてみたということだと思います。

特にポイントということでいうと、特にプログラムのところ、1つは共同生活と実践の場を組み合わせた新たな実践型のプログラムをつくっていくのが大きな目玉とっています。また、オンラインの活用というところでチームビルディングという手法を取り入れる。黒字にしてありますけれども、こういったプログラムの中で仕事・学業との両立を図っていく。それから、多様な者を巻き込んだ事業を展開していく。こういったところが大きなポイントとっております。

以上でございます。

南島座長 端的に御説明いただきまして、誠にありがとうございます。

この新事業、今まで議論してきた内容の特に打ち出せそうなものを黒字のゴシックで書いております。これで新しい事業の打ち出しをしていきたいと考えておりますが、今までの事業を長年展開してきたわけですが、その上でさらに何を強化することができるのかということを書いております。もう少し強く打ち出すべきではないか、もう少しこういうふうにしたら伝わるのではないかという視点が十分ではないところもありますけれども、そういう点について御意見を頂ければと思います。全体像を見ながら、これを打ち出してはどうか、ここを強調してはどうか、あるいはさらにこういう視点もあるのではないかと、そういう全体像の御議論を頂戴したいと思っております。

今度は委員からまいりたいと思います。順番が逆になりまして、家島委員、川澤委員、菊地委員、中村委員、宮寄委員と行きまして、駒形理事長、千葉副部長という順番で御発言を頂こうと思っております。

それでは、先ほど御発言いただいたばかりで大変恐縮ですが、家島委員から御発言いただけますでしょうか。

家島委員 家島です。よろしく申し上げます。

資料2については、これからのイメージということで、まず、目的のところに大きく方向性というか、グローバルリーダー像が明示されていて、下にその戦略が具体的に書かれているものと理解しております。どれも私から補足することがないくらいしっかりとできていると思います。ただ、教育者あるいは研究者の立場から少しだけ補足、コメントさせ

ていただきたいと思います。

「意欲の高い青年の参加」ですが、こちらに大学あるいは学校、教育団体あるいは研究機関、こういったものを加えていただければ幸いです。もちろん経済団体を目玉に取っかかりということは分かっておりますし、当然のように学校とか教育・研究機関も射程に入っていることは理解しているのですが、文字でしっかり書くということも大事なかなと思いますので、そうしていただければありがたいというのが一点です。

2枚目の4 Step、何Stepでもいいとは思いますが、私の感覚からすると「募集・選考」というのはStep 1と言ってもいいと思いますし、Step 0というふうに言ってもいいのかなと思っております。実際のプログラムがStep 1、2、3、ホップ・ステップ・ジャンプのような3段階でありまして、さらにStep 3で終わりではなく、Step 4というか、エピローグなりアフターだったりというような事後の活動、ネットワーキングの強化というものがある。サンドイッチ型になっているというのがいいのではないかと思いました。

そして、この図で言うところのStep 2「関係構築」とStep 3「交流と実践」が実際の参加者が体験するプログラムかと思いますが、この部分がオンラインとFace to Face（対面）のハイブリッドになっているところがもう少し打ち出せると新しくなったというところが見えるのではないかと思いました。

Step 2とStep 3を小さくStep 1、2、3というふうに分けまして、事前のオンライン研修あるいは交流といったところと対面での共同生活、交流・実践といったところ、それからここには書いておりませんが、ラップアップ、総括、振り返り、省察、リフレクション、いろんな言い方がありますが、体験の振り返りと今後に向けてといった展望の部分、こういったプログラムが非常に重要かと思しますので、それは分けて明示してもいいのではないかと思います。例えばインターンシップであれば事前指導と事後指導というのが必ずセットになっていると思えますけれども、その事前と事後が実は本ちゃんのインターンシップの中身の質をかなり左右すると言われておりますので、事前と事後というのは取り出してはっきりと位置づけたらどうかというコメントです。

以上です。

南島座長 トップバッターでお願いしたにもかかわらず、しっかりいろんな視点を御提供いただきまして、誠にありがとうございます。ハッとした点が2つあります。

1つは、大学・研究機関というところをしっかりと書くという部分ですけれども、大学のみならず、研究機関の方々に参加を求めていく、国立研究開発法人なんかもありますので、そういうところの参加を求めていくというのも面白い視点だと、確かにそういうところはしっかり書いていかないといけないと思います。

もう一つは、Step 1、2、3、4と書いていますが、確かにこの令和の新事業ですと事後の交流を強化しようとしていますので、船に乗った、イベントを経験したというところをスタートラインと見なす。ここからがいろんな活動や交流のスタートなのだという見え方、見せ方も大事なかなと思います。事業をつかさどっている側からいいますと、イベ

ントが終了してネットワークを構築すると終わりというふうに見えなくもないわけですが、そこに参加している参加者の側から見ると、やはりここからスタートだ、ここから何ができるのかと考えていく、この期待感というのは非常に大事な視点かなと思いました。はっとさせられた点でありますので、強めにコメントを申し上げておきたいと思います。ありがとうございます。

それでは、川澤委員、お願いいたします。

川澤委員 ありがとうございます。私からは2点申し上げます。

1点目ですけれども、今、映していただいているスライドのStep1の多様性重視枠の創設、これについては前回の委員会での資料や議事録を拝見しまして、多様性の重視のときに語学力のハードルをどこまで求めるかというのはあるかなと思いました。例えば、語学力のハードルを下げて幅広く参加者を求めて、決定から参加までのリードタイムを長くして語学力アップを促すとか、プログラムの中で発見や再発見を重視するというのが重要かなと思いました。そのときに、多様性重視枠を創設すると、その枠で参加された青年の場合、もしかしたらプログラムの中で何か発見してすぐに成長というよりは長期的な観点で事後活動での気づきが大きくて、事後活動を積極的に頑張って長いスパンで成長するということもあり得るのかなと思いました。ですので、多様性重視枠の創設をするならば、特に短期的だけではなくて長期的な効果、成長の過程をきちんと丁寧にフォローする必要があると思います。

もう一点が、1つ前のスライドの「効果的なプログラム」で地方公共団体との連携、多様な者を巻き込んだ事業というところで、日本でも国際交流を積極的に行っている自治体があると思うので、そういうところと協働事業という形で自治体側もきちんと予算をつけて協働でやっていけば、かなりいい事業ができるのではないかという期待を持ちました。

ただ一方で、仮にかなり国内で閉じる場合に海外からの参加青年にとって魅力あるプログラムになるかということが気になりました。つまり、日本国内の資源を非常に有効に使うというのは日本側にとってはかなり期待が持てる部分もあると思うのですが、海外の青年から見てそれがどう映るかというのは、海外の既参加青年をサンプリングしてみたりヒアリングしてみたり、その辺りで日本をベースにしても魅力あるプログラムになるような趣向が必要かと思いました。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

多様性重視枠、国際交流に熱心な地方公共団体との連携、最後の点、海外青年側からの見え方を意識するということですね。特に海外青年側からの見え方というのは、こちらの枠組みの中では若干薄いところではありますので、重要な御指摘を頂いたと思います。ありがとうございます。

それでは、続きまして、菊地委員、よろしくお願いいたします。

菊地委員 ありがとうございます。

私は全体的にアグリーで、まとめていただきまして、ありがとうございます。その中で3点、意見を述べさせていただきます。

1点目は、「共同生活と実践の場を組み合わせた」とあると思いますが、ここはすごくよいと思いました。Learning by Doingという実践による学びというのがあるのですけれども、そこが最も成長には大事だと思っているので、もっとここを強調したいと思っています。

我々もプログラムをたくさんやっている中で、その後、起業したり社会課題に取り組む人が多いプログラムを頭の中で探してみたのですけれども、インド合宿とルワンダ合宿というのがあって、そのこのプログラムに参加した方々はぼんぼん起業していつているのです。何でだろうと考えたのですが、3つぐらいあります。今後の人生案、今後どう自分は生きたいのか、どういう内容で起業、新規事業を立ち上げるのか、そういうものを必ずプログラム内で出させています。それをすることによって終わった後でもそれに向けてアクションする人が多いというのはあります。そういうのを考える上で常識が覆される経験を何度もする。何度も折れる経験をする。リアルに触れる経験、自分と向き合う時間、他者に気持ちを送る経験、時間内に必ずアウトプットするというのがよかった点なのかなと思いました。

2点目は、目的設定とリフレクションを入れるといいのではないかと考えています。家島委員が言ってくださったように、なぜ参加したのかというのはやはり大事だと思うのです。資料2の2枚目に行っていただけていいですか。「関係構築」の部分で必ず目的設定を入れるといいのと、あとは、Stepが4つで終わっているのですけれども、Step3か4に一個大事なものの、リフレクションを入れたほうがいいかなと思いました。このプログラムで何を学んで気づいたのか、それを今後どう生かすのかというリフレクションが最も大事なので、ここは一つ重要視したほうがいいかなと思いました。燃え尽きるのではなく次へのステップにしていきたいと思っています。

3点目は、多様性の広がり加速をしたいと思っています、その工夫が必要だと思いました。例えばStep3で実践の場があると思うのですが、実践の場も幾つかテーマを増やすと多様性も広がって、お互いが発表することによって自分が全然気づいていなかったことに気づけることがあると思うので、いろんなテーマを用意する。Step2の「関係構築」も内面を深掘りするようなコンテンツが必要かなと思いました。外からの刺激による多様性と、内面を打ち明けることによって多様な価値観があるということにも触れていただきたいと思いました。

以上、3点なのですけれども、もう一つ、これはコメントとして感想ですが、このプログラムを見て社会人を増やしたいと思いました。例えば、私たちはこれを今、考えているのですけれども、このプログラムは最高なので、私たち自身が参加したい、うちの社員に絶対行かせたい、そういうようなプログラムをつくっていきたくて改めて心を奮わせたということでございます。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

Learning by Doingの御指摘、リフレクションの御指摘、多様性の加速化（アクセラレート）の御指摘、社会人を増やしたいというところに頑張っつなげましょうという呼びかけを頂いたということでございます。ありがとうございます。

それでは、中村委員、いかがでしょうか。今まで御発言いただいたものに対するレスポンスも含めてで結構でございますが、いかがでございましょうか。

中村委員 ありがとうございます。

プログラム自体は確かにここに書かれているようなことをどんどん新しくチャレンジしていけば、よりよいものになると思うのですが、ちょっと違う視点から3つほど述べさせていたきたいと思います。

1番目は、当初から私、何回か発言しているのですが、国際親善という目的で「東南アジア青年の船」事業、日本・中国青年親善交流、日本・韓国青年親善交流が始まった。このプログラムをなぜ国が始めたのか、ここはとても重要ではないかと思うのです。かつ、共同事業として「東南アジア青年の船」事業などはASEAN10か国と共につくってきている、その視点が今、プログラムを考えるとところからは抜けているのではないかという印象があります。

今回話しているのは、私の印象ですと「世界青年の船」事業がベースになっているようなイメージで、それはそれで一つの例としていいのですけれども、「東南アジア青年の船」とか日中や日韓というのは、島国日本が隣国とどのように友好的な関係を築いていくのか、今後、様々なコンフリクトが考えられるかもしれない中で、こういった地道な国際交流をしていくことが日本の安全保障あるいは地域の平和に貢献する、そういった非常に深い政治的な意図、いい意味で近隣の平和を築いていくという意味があると思うのです。そこを忘れてはいけないと思います。

今、日露関係は難しい状況になっていますが、隣国という意味ではもちろんロシアも隣国なので、将来的には日露交流のようなものもあるべきではないかと思います。遠い国とはそんなにコンフリクトは起きにくいのですが、どうしても近隣の国の場合は、過去に日本が攻めていったとか様々な理由があるので、こういった近隣諸国との国際交流は実はとても重要だということはいろんなことを考える上で押さえておかななくてはならないと思います。

2番目は、今、感染症が起きてしまっているのですが、これまで友好活動してきた、船で世界を回るということがやりにくい状況にはなっていますが、これは世界的にもユニークなプログラムであることは確かなので、もちろんここ数年間は難しいので、違う工夫をしたやり方をせざるを得ないということがあったとしても、船で世界を回る、あるいは東南アジア各国を回るといものはしかるべきときに復活させるという意味はしっかり持っていたほうが良いと思っています。

3番目に、参加青年にとって各国でホームステイさせていただいたというのは非常に大きな経験でありますし、また、皆さんはホームステイファミリーとその後もずっと連絡を取り合ったりして、まさに民間の国際交流の土台を築いているという部分もあります。もちろん海外から来た方が日本でホームステイされた場合もそうだと思いますので、こういったホームステイの要素も、地味ですけれども、非常に重要な共同活動として忘れてくないと思われましたので、あえてここで付け加えさせていただきました。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

この事業の一番土台となる部分を確認して御発言いただいたということだと思います。これは、ぜひ報告書の冒頭のほうに改めて確認するという意味で内閣府には記載を、書ける範囲で結構ですので、お願いいたしたいと感じた次第でございます。貴重な御指摘、また重要な御指摘ありがとうございます。

それでは、宮崎委員、よろしくお願いいたします。

宮崎委員 イメージのところの経済団体等への広報強化ですが、経済団体はいろいろあると思いますので、そういったところに事前にヒアリングをしていただいて、各団体の特徴とか参加企業の実態を把握していくのも非常に重要なことだと思います。

新プログラムのところで社会人向けの短期プログラムの検討もございますので、こういったニーズがあるのかということを経営にもう一度ヒアリングしてもらった方がいいのかと思っております。企業が人を出すといたときに、コストにもなりますので、やはり目的といったところを伝えていかないと賛同を得られないと思います。実際に社会人経験を経て、こういった魅力あるプログラムに参加することで新たな気づきが生まれて企業活動にプラスになると思いますので、その点をもう一度、今回の策定に当たって検討していただければと思います。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

経済団体のニーズを把握するというのと、あと、内閣府が呼びかけていくためには目的の共有をしっかりとやっていくことが必要、この2点を頂いたのかなと思います。ありがとうございます。

宮崎委員 すみません。経済団体という部分もあるのですが、経済団体に参加しているのは企業ですので、最終的には企業のニーズということになると思います。

南島座長 失礼しました。団体ではなく、主として企業のニーズをということですね。ありがとうございます。

それでは、駒形理事長、お願いできますか。

駒形オブザーバー ありがとうございます。

プログラムのStep 1からStep 4までうまく流れをつくっているという印象ですけれども、2点申し上げたいと思います。

1点目は、Step 4の の既参加青年のプログラムへの参画ということです。1つは、本番のプログラムに既参加青年も参加するということがあるかなと。昔、「東南アジア青年の船」事業ですけれども、日本参加青年、新規で参加する人だけではなくて、過去に「東南アジア青年の船」事業だけでなく「世界青年の船」事業とか国際社会青年育成事業に参加した人も参加したことがあります。そのとき、たしかファシリテーターではなくてリエゾンということで事務局管理部との連絡役みたいな役割を持たせて参加させたことがありますので、今後そういったことを考えるなら、何らかの役割を持たせて、事業経験者として、お兄さん、お姉さんとして、新しく参加してくる若い人たちの啓発とかリーダーシップを執るということで大変効果があるのではないかと。国は日本人だけではなくて、海外のそのときに参加した国ではなくてもいいのではないかと思います。バラエティーに富むし、多様性も広がるので、様々な国の既参加青年が参加するのが望ましいのではないかと思います。

それから、交流事業の中で共同生活というのがあります。その中で本番の事業に参加しなくてもオンラインで世界各国から参加することができますから、ディスカッションの際とか何か交流会とかオンラインでよりグローバルに、これ自体グローバルキャンプみたいなものですから、もっとより広く世界中の既参加青年がオンラインで参加できるような仕掛けもつくったらいいのではないかと思います。

2点目は、事業の狙いとか趣旨なのですけれども、先ほど中村委員がおっしゃったことと関連しますが、そもそもどんな人材を育成するのかということで、グローバルリーダー育成ということで国際感覚というようなことも書かれています。今、考えられているプログラムに日本の参加青年の育成ということを考えると、日本の参加青年に海外の経験をさせなくてグローバルリーダーの育成ができるのか、単純ですけれども、率直な印象です。海外から来た人と交流することによって、疑似体験なのかもしれませんが、百聞は一見にしかずということで、今までやってきたことの効果に一定の評価がされていると思うのですが、彼らが海外に行くことによって初めて自分が知らない世界を直接目で見て肌で感じるというのは若いときは非常に強いインパクトがありますから、海外を経験するという事は大きな視点として一つあるのではないかと。ホームステイについては、特に海外から来て日本でホームステイするという事は海外の青年にとっては非常に大きなインパクトがあって、評価も非常に高いプログラムだったと認識しておりますので、その点も意識をしていただければと思います。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

今、御発言いただいた中で、リエゾンということで参加してもらったというところをもうちょっとお聞きできればと思うのですけれども。

駒形オブザーバー たしかリエゾンだったと思います。連絡役みたいな。

南島座長 既に参加した方ももう一度役割を頂いて参加するという事は大体どれぐらい

やっというらっしゃるものなのでしょうか。あまり数はないのでしょうか。

駒形オブザーバー ないですね。過去に1～2回やったぐらいだと思います。

南島座長 なるほど。

駒形オブザーバー 原則、内閣府の事業は、一度「東南アジア青年の船」事業に参加したらほかの事業には参加できない。「世界青年の船」事業に参加したらほかにも事業には参加できないというのが原則なので、基本はそういうことはないのですが、一度だけリエゾンということで既参加青年枠みたいなものをつくって、船の事業だと10ぐらいのグループに分かれるのですが、各グループにリエゾンを1人置いて管理部との調整役をやるという役割を与えて、そのリエゾンの仕事をしてもらうということで、そこに既参加青年の人を配置するというので、数としては各グループ1人なので10名程度だったと思いますけれども、そういうことをやったことがあります。

南島座長 ありがとうございます。

中村委員が手を挙げていらっしゃるけれども、ひょっとしたら御存じなのかもしれないですね。中村委員、どうぞ御発言ください。

中村委員 今の関連で、今はあくまでもリエゾンという形の役割について言及されていましたがけれども、管理部の一角を既参加青年が担うということは、私が知っている限り、これまでもずっと少なくとも「東南アジア青年の船」事業等ではやられていました。管理部の方々は、政府の役人の方が一定期間セコンドメントのような形で乗られるというのはあるのですが、数人の枠は既参加青年がアルバイトのような形で乗る、そういうことは今までもされていると思います。リエゾンの役割とはちょっと違うと思いますけれども、そういった既参加青年の参加の仕方があったということを情報共有としてお伝えしておきます。それはもう少し若い人ですね。参加して、就職前の一定期間、ちょうど自分が行けるからということで手を挙げて参加する、そういったことは過去にもあったと思います。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

どの程度の規模でやっていたかということも確認の必要がありそうですね。ありがとうございます。

それでは、お待たせして申し訳ありません。日本旅行業協会の千葉副部長、お願いいたします。

千葉オブザーバー ありがとうございます。

まずは、このようなすばらしいプログラムと申しますか、内閣府の事務局につくり上げていただいたことに御礼申し上げたいと思います。

私としては、どなたかもおっしゃっていましたが、共同生活と実践の場を組み合わせた新たな実践型プログラムというのは全く賛成でございます、この中身をどういうふうにしていくのかというのが今後の課題だろうと思っております。

また、座長からも、Step 3 が終わりではなくて、ここからスタートだというお話がありましたけれども、企業目線で申し上げるとまさにそのとおりで、行って帰ってきて、長い研修期間を与えたにもかかわらず、ここからどうしてくれるのか、企業目線で言うと、そういうところなのだろうと思います。

宮崎委員もおっしゃっていましたが、企業が率先してこの事業に人を出したいというようなものにしていくことによって、当然、経済団体に広報を強化してくるようになり、そこがないとお願いベースではなかなかいかないだろうと思います。例えば幾つかあるプログラムの中に、その企業、業界が抱えているような課題であるとか、諸外国の方ないしは異業種の方の共同生活の中でそういった一つの課題を解決していくような、そういう目線のもので即戦力として帰国後に生かせるもの、研修後に生かせるもの、それから長い目で見たときに、3年後、5年後、10年後に生かせるものというような形でその企業、業界そのものに大きく貢献できる、そういうプログラムないしはそういう方に来ていただきたいと思いますし、そのような中身になっていくと、今後ますます膨らみが出てくるのではないかと期待しておりますし、ぜひそういうふうにしていかなければいけないと感じたところです。

以上でございます。

南島座長 ありがとうございます。

こういう絵を描いていきますときには、どうしても事業推進側の視点が強くなってしまいますので、そこを受け手側の視点で見えるような絵にさせていただくということは大事な視点かなと思います。内閣府の側からは「それから」ということになるかもしれませんが、当事者の目線では「これからどうするか」という話になるかと思っておりますので、そういう視点も大事にしななければならないと改めて思ったところでございます。ありがとうございます。

さて、一通り御発言を頂きましたが、全体を含めまして、この新プログラムについて打ち出していかなければいけないところはどこなのかということをお伺いしていたわけですが、追加の御発言があればお願いしたいと思います。内閣府の側も併せて委員の先生方にお聞きしたい点がお話の中でありましたら、御発言いただければと思います。いかがでございでしょうか。内閣府の側は何か御発言ありますか。「さらにここを伺っておきたい」みたいなところはございますか。

梅田参事官補佐 皆様方から様々御意見を頂いて、特にたくさん出てきた中で言うと、プログラムをStep 2、3 というふうにしていますけれども、3の後の4に行く前のところ、ラップアップであったり、そういうところをもう少し強化していくべきではないかというお話があったかと思っております。こういったところももう一息、こういうことをやってみたらいいのではないかと、そういうところがあれば教えていただきたいということと、もう一つ、このプログラムについてももう少し継続的に実施していくということも重要なのかなと思っておりますので、この辺りも御意見があれば頂ければと思っております。

南島座長 ありがとうございます。

事後の活動としてここまでに出てきていたのは、もうちょっと調べないと何とも言えませんが、リエゾンとか、あとはネットワークを通じての活動とのつながりをつけていくということではありますが、プラスアルファで何か御意見を頂けましたら幸いです。家島委員、よろしく願いいたします。

家島委員 先ほど振り返りの部分、リフレクションの部分についてというコメントがありましたので、そこについてお答えいたしたいと思います。

私の授業では、最終課題として自分が授業で学んだことと、それを生かしてどう卒業まで学生生活を充実させていくのかということとを1分間でスピーチさせるというような課題があります。それと同時に、この授業の構造を自分なりに再構成して、どこが魅力だったのか、何が自分にとって成長につながったのかということを含めた授業プロモーションビデオをつくる、動画作品をつくるといったことを課しています。これが一石二鳥といえますか、つくる学生にとっては自分の体験の振り返りにもなりますし、決意表明にもなるので、言った以上はやらなければいけないと思ったり、あるいは授業の全体像をもう一回見直さないと授業のPVがつかれないということで非常にいい仕掛けになっているかと、手前みそですが、そういうふうには思っております。

また、運営側とか授業担当者側からすると、それを見て、今どきの若い人たち、青年というのはこういったところが響くのだとか、ここはあまり響かないのだといったことをデータ収集することができるといった効果もあります。

また、よいPV作品があれば、許可を取って、オフィシャルなというか、公式なといえますか、このPVはすごく出来がいいし、全体像もまとまっているので、次年度の学生向けにシラバスに掲載してもいいかと言って、オーケーですと言われたら、それを次のリクルートにつなげる、そういったこともできるのではないかと思います。

参加者が体験の振り返りをするといったときに、活動のプログラムの振り返りをする、つまり学生とか、ここで言うところの参加青年にこのプログラム自体をもう一回構造化してもらい、あるいは振り返ってもらい、印象的だった部分をまとめてもらうというような取組を事後のラップアップだったりリフレクションというような体験、事後研修のところ、事後活動のところに入れておきたいかなと思います。

それから、動画をつくる部分についてはちょっと負荷が高いかもしれませんが、先ほどリエゾンという言葉がありましたが、要するに、既参加青年が何人か入っていて、あるいは発信者、キュレーターという言葉もあるかと思うのですが、そういったインフルエンサー、キュレーターと言われるような人、外に発信する目的の人が一人入っていて、修学旅行では写真を撮るカメラマンがいると思うのですが、そんな形の人が入っていて、終わった後、最後のところで皆さんのやってきた活動はこんなこともやりました、あんなこともやりましたみたいなことを写真とか音楽に乗せながら、振り返りムービーを流すなんてこともありえるのかなと思っておりました。ということで、授業からの応用と

いいですか、トランスファーできるかもしれない部分について情報提供でした。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

川澤委員も手を挙げていただいていますけれども、ちょっとだけコメントさせてください。動画は強化しなければいけないと私も思っておりまして、その動画の作り方ですけれども、事業者に入っていただけてつくっていただくという方法もありますし、事業者を手助けをしていただけて参加者につくっていただくということも考えられるかなと思います。いずれにしても何らかの形で動画等については情報発信の関係で強化していく必要があるかと思っております。ありがとうございます。

川澤委員、よろしくお願ひいたします。

川澤委員 ありがとうございます。

今の参加者がつくるというのは非常に面白いと私も思っておりまして、そこで次の参加者に向けて自分たちが何ができるかということを考えるきっかけにもなると思いますので、そこはすごくいいアイデアではないかと思いました。

一点コメントです。先ほどプログラムについて継続的な取組とする必要があるのではないかというお話がありました。今回、新プログラムで地域の実践活動で地方公共団体との連携というお話があったかと思っておりますので、仮に連携して取り組むとなると、受入れ側の自治体としても単年度で実施するというのはかなり負荷が高いと思っておりますし、効果も出しにくいのではないかと思いました。ある程度複数年で取り組めるという形で、地域の大学やNPO、関係者と協議して、いいプログラムをつくっていくというような見通しがないと、なかなかコミットメントが得られないのではないかという気がしました。その点は、国内だけにとどまってしまう話になると、先ほど海外に行くことが重要だというお話もありましたので、コロナ禍で当面、国内で複数年で実施して、その成果をもって今後海外に行くときにどういうプログラムが必要なのかということを考える、いろいろと試行錯誤できるようなプロセスが必要なのかなという気はいたしました。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

地域での取組をどういうふうにして組み立てるか。一定の時間はもちろん必要だと思っておりますし、募集して手を挙げていただいて、それを事業として組み上げていくのは手間暇もかかる話ですので、よくよくどういう手順でやっていくのかということは実務的には詰めなければいけない論点かなと思います。さらに大学との連携となりますと、高校との連携は教育委員会を介して意外とスムーズにできるのですけれども、大学との連携はややハードルがありますので、そこまで含めてということであると、募集の仕方とか声かけの仕方まで含めて実務的に詰めていかないといけない課題がいろいろあるかと思っております。そういう御指摘を頂いたのかなと思います。ありがとうございます。

ほか、いかがでございましょうか。自由に御発言いただいて大丈夫です。中村委員、よ

ろしくお願いいたします。

中村委員 2つほどコメントさせてください。

今回いろいろ考えるようになった理由は、やはり感染症によってプログラムが中断というか、今までのようにできなくなったということがあったと思います。なので、今こういうふうに考えているのですけれども、議事録として残すという意味で申し上げておきたいのですが、感染症のような状況があるからこそ、今こういった形でトライする。トライアル・アンド・エラーをやってみる。でも、より海外に出ていけるような状況が戻った際には、このままの状態を続けるのではなくて、新たに海外にどんどん出ていくようなプログラムを復活させていくということはしっかりと意図として持っていたほうがいいと思います。それが一点です。

もう一つは、すごくマイナーなのですが、今、見せてくださっている令和の新プログラムのイメージの下の方に、対象年齢が多様性重視枠では40歳までと書いてあるのですが、40歳というのは、四十にして惑わずというほどなので、違うかなと、せいぜい30代までではないかなという感じがしたので、一言添えさせていただきました。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。40歳までというところは確かにそうですね。

菊地委員、お願いいたします。

菊地委員 ありがとうございます。

リフレクションのところですが、家島委員が言ってくださった振り返りのところにも似ているのですけれども、私たちは1分間自己紹介シートというのをやっています。内容としては「私の自分らしさは」にあると思っています。私を実現したいことはこういうことです、なぜならこういうこと、ビジョンの背景とか、原体験とか、提案性とか、つくり上げたい未来というのを発表してもらって、現在はこういう活動を進めています、今後はこういうことをやりたいので、皆さん、協力してくださいというのを必ず最後に言ってもらっています。

これをやるメリットとしては、参加者の振り返りになるというのも一つなのですが、我々としても、彼らが一人一人どういうところに強みがあって、何をやりたいのか、何に困っているのかというのが最後の時点で分かるのです。次へのアクションの提示がしやすいというのがメリットですので、共有でございました。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

その他、全体について御発言いただける方はおられますでしょうか。駒形理事長、お願いいたします。

駒形オブザーバー 補足なのですが、Step 3 からStep 4 に行くことに関連です。例えば「東南アジア青年の船」事業だと、事業の修了式の直前に、それぞれの国ごとにこの事業が終わった後どういうことをやるか、いわゆるポストプログラムアクティビティー

(PPA)と言っていますが、どんな社会貢献活動をするのかということ为国ごとに発表します。発表して、その後どういうふうに行っているかということ発信している国もあります。そういうことなので、Step 3で地域実践活動についてはアウトプットなのですが、そこで終わりにならないで、事業が終わった後、日本だけではなくて参加した国がそれぞれ事業の成果を持ち帰って、それぞれの国でどんなことをやるのかを発表して、それをフォローアップしていくということも大事ではないかと思った次第です。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

他国からのフィードバックをもらう方策を検討するというのは非常に重要な御指摘を頂いていると思います。ありがとうございます。

そのほか、いかがでございましょうか。よろしゅうございましょうか。

そうしましたら、私からも若干コメント申し上げたいと思います。大きく2点ございます。

1点目は、「令和の新プログラム」と書いていただいておりますが、プログラムの名称です。事業の性質については変わりがないので、対外的には継続性を持ったほうがいいのかなと一方思っております。他方で、行政事業レビュー等で問われるのは、昭和34年から開始しているということで、長い間、微調整はしてきているかもしれないけれども、事業の在り方について抜本的な検討をされていないのではないかというふうに、同じ名称の事業だと思われるというところもあります。かなり難しいところではありますけれども、事業の名称をここで改めるのか、あるいは引き続き同じ名称で継続性を持たせた形でここで抜本的な改革をやったというふうな説明をするのか。これはちょうど選択のタイミングにあるかと思っておりますので、部内でもしっかりと議論していただいて、どちらの説明をするのかという御用意を頂ければと思っております。

もう一つは、事業の見直しに関して、感染症があったので見直しをしていきたいと思いますということでこの会議はスタートしたかと思っておりますが、会議の途中でウクライナの問題が出てまいりました。直接、ウクライナ等に言及していただく必要は全くございませんけれども、国際理解の重要性ということを今日、中村委員からも御指摘いただいたかと思っております。このことはやはり強調してもよいのではないかと。感染症のみならず、国際理解の重要性が高まっている。この事業の価値に関することですので、強調していただいてもいいのではないかと考えておりますので、ぜひ御検討いただければと思っております。

以上、2点、コメントとして申し上げておきたいと思っております。

その他、内閣府も含めまして、関係者の皆様、今日の時点での御発言でございますでしょうか。よろしゅうございましょうか。どうぞ、御発言ください。

○家島委員 家島です。

先ほどの中村委員の発言にも関係することなのですが、青年の定義は内閣府としてどのようにお考えでしょうかといったことをお伺いしたいと思っておりました。私は日本青年

心理学会という学会に入っている委員もしているのですけれども、確かに青年の定義で年齢が結構延長されています。青年とはどこまでが青年なのかという問いは学術的にもなかなか決まっていなくていいところがあります。

確かに四十は不惑、あるいは初老なんて言われますけれども、それは人生50年時代かなと。人生100年時代においては、まだ半分、折り返しにいていないので、青年に入るのか、それとも、各国の首相などを見ると大統領になった39歳もいたりしますので、40歳になったら完成みたいな形になるのか。この辺り、今後の結構大事なポイントにもなるのかなと思います。アラムナイというか、参加した後、いわゆるシルバー世代が大いに関わってくる時に、かつて青年だった人たちがどういうふうに関わっていくのか、その人たちに対して支援することがこのプログラムとして妥当かどうかというところにも関わってくるかもしれないので、改めてメンターゲットとしての青年は大体この辺りでやってきたとか、この辺りを考えていきたいとか、その辺りも含めてコメントがあればいいのかなと思いました。

私個人としては、青年というのはメインはここだというのはあるのだけれども、幅広く広げてもいいのではないかと思いますし、ダイバーシティという観点がありました。ダイバーシティというのは基本的には横軸で、留学生だったり、障害があろうがなかろうが、性的マイノリティであろうがなかろうが、そういった多様性を意味するという横軸の空間軸の多様性もあると思うのですが、ジェネレーション、縦軸、世代の年齢の幅広さというのも多様性につながっていくのかなと思ったりします。大学でいうと、日本の大学は18歳から22歳までが中心ですが、海外の大学には30代、40代の大学生がいたりして、それがダイバーシティを担保しているという側面もありますので、この年齢の幅がダイバーシティに関わってくるのか、あるいは青年としてはそこも入れるべきなのか、引くべきなのか、この辺り、内閣府の方針を先に押さえておきたいと思ったので質問です。これは次回回答でも構いません。コメントです。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

そもそも青年とは何かということで、成人の前までとか言われたり、39歳までと言われたり、いろいろ言われますけれども、公式見解をお聞きになっておられます。内閣府、すぐに答えられますか。

梅田参事官補佐 今、確実にどこが正式かというのはなかなか申し上げにくいのですが、恐らく一般的には30歳というのが一つ枠組みとして、子供、若者ということでは、若者の定義は30歳というのが多いのかなと思っております。一方で、30歳までに限らず、もう少し広く取っているという例もありますので、その辺り、どこまで広げるかというのが、正式な、明確に定まった定義はないのかなと思っております。どこまでを青年とするかというのもターゲットとして一つ大事なことだと思いますので、今、こちらは40歳と書いていますが、検討を進めていきたいと思っております。

あと、幾つか御議論も頂きましたけれども、海外についてどの程度行けるかというのなかなか難しいところもありますし、この新たなプログラムを継続的にやっていくということも一つ大事な視点かなと思っておりますので、この辺りもまた皆様方から、今日は時間も限られておりますけれども、御意見も伺いながら進めていければと思っております。よろしく願いいたします。

南島座長 ありがとうございます。

ちなみに、青年の定義は統一見解がなく官庁ごと、あるいは事業ごとにあります。45歳説もありますし、39歳説もありますし、34歳説もありますので、難しい話かもしれませんが、ただ、「この事業としては」ということを問われていますので、そこは御整理いただけるとありがたいかと思っております。

その他、御発言ございますでしょうか。

○川澤委員 川澤ですけれども、一つだけ。先ほど海外に行くかどうかというお話がありまして、今回、コロナ禍において新しい事業のプログラムの中身を考えるという話だったのですが、他方で、こういう青年、どこまでというお話がありましたけれども、若い方を対象にされているので、恐らくオンラインやネットワーク、そういった新しい空間に対する抵抗感は確実になくなっているのだと思います。今回、コロナ禍で新しくオンライン交流であるとか、その辺りがボリュームとして多くなってくるのかもしれないですが、そこはコロナ禍というだけではなくて、今後も恐らく事業の中の重要な部分として位置づけていかざるを得ないのかなと、いったほうがいいのではないかと個人的には思っています。その辺り、対象者と今回コロナ禍で新しくチャレンジする部分というのがこの事業の非常に重要な契機になっていくのではないかと思います。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

今の川澤委員の御発言に付け加えまして、社会人向けの短期プログラムというところもしっかりと打ち出していきたいという話もありましたので、そこも含めて、青年の範囲、対象、ターゲットグループをどういうふうに見せるのかということについては改めて内閣府のほうでまた御議論を部内でもお願いしたいと思っております。

その他いかがでしょうか。御発言は大丈夫でしょうか。よろしいですか。

本日も大変熱心に御議論いただきまして、誠にありがとうございました。そろそろ時間となりますので、本日の意見交換についてはここまでとさせていただきたいと存じます。先生方、委員の皆様方に御礼申し上げたいと思っております。ありがとうございます。

それでは、最後に内閣府事務局より連絡事項をお願い申し上げます。

梅田参事官補佐 本日も大変有意義な御意見を頂きまして、ありがとうございます。

次回でございますけれども、6月2日を予定しております。また、次々回ということになりますけれども、次々回は恐らく最終回ということをご予定しておりますけれども、こちらは6月中旬で開催を予定しております。また改めて日程については調整を行いまして決

定してまいりますので、御協力のほどよろしくお願いいたします。

以上でございます。

南島座長 それでは、本日の議論はここまでとさせていただきたいと思います。御多忙のところ、御参加いただきましたことに改めて御礼申し上げまして、第4回「青年国際交流事業の在り方検討会」を閉じさせていただきます。先生方どうもありがとうございました。